



図8-10 伊関校区の位置

伊関校区は、種子島の北東部太平洋側に面しており、本市街地から約一二キロメートルの地にある。平野はあまり広くないが、海岸段丘の風光明媚な地形を形づくっている。西京川の悠久の流れによって運ばれてきた白い砂浜と岩礁が織りなす風景を木折坂から見下ろすと、「絶景」という言葉がよく当てはまる。

気候的には、黒潮の流れる太平洋に面しているので高温ではあるが、年間を通して極端な暑さや寒さもなく過ごしやすい地域である。基幹産業は農業で、サトウキビやサツマイモ、園芸

第1節 伊関校区の概要

第五章 伊関校区

などを生業としているが、農業の不振などによる若年層の流出、校区民の高齢化、人口減少による地域共同体としての機能維持が大きな懸念の一つである。

第二節 伊関校区の成り立ち

伊関校区は、明治十四年（一八八二）十一月二十六日に国上村から分村して新しく伊関村として出発した。伊関・浜脇・沖ヶ浜田・柳原の四集落から成り、令和五年（二〇二三）十一月末現在の校区人口は、三七八人である。

伊関集落は西京川の東側に位置し、大伊関を中心として太平洋と深い森に挟まれた海岸段丘の上にある。耕地面積も少なく、山の斜面や山を越えて数^{キロ}メートル行った場所を開拓して田畑を耕作し、協力しあって現在に至っている。

浜脇集落は、伊関集落と地理的に近く、昔から様々な面で交流があった。浜脇の塩屋は元文三年（一七三八）に沖ヶ浜田の塩戸が分かれて開設したという。

沖ヶ浜田集落は、伊関校区再編と通学距離の関係によって安納校区から伊関校区に編入された。元来沖ヶ浜田は塩屋集落であり、文和元年（一三五二）に六代島主時充公相模の国である鎌倉から指導者を招き、製塩が始まった。

昔ながらの手法による黒糖づくりが現在も行われている。小屋から立ち上る煙と甘い香りは、冬の種子島の名物となっている。柳原集落は、明治十九年甑島から移住してきた人々が開拓してきた。このほかに、又延・小浜・織佐という集落もあった。

西京川流域には、水車小屋が四カ所確認されている。水車小屋の設置者は、榎本清助氏・熊野谷仙蔵氏・南吉之助氏・西手

氏であった。また、樟脳小屋も三カ所（伊関 浜元虎吉・柳原 橋本忠右衛門・羽生理丸）、鍛冶屋も柳原に一軒あったが、現在は全てなくなっている。

昭和三十七年（一九六二）十二月に福岡県の北九州にある東邦金属株式会社が種子島第二採鉱所を開設し、操業を始めた。砂鉄は、鉄の含有率が八〇割以上、チタン成分を取り除くことで良質の鉄が採れるようになり、現金収入の少ない寒村に恩恵をもたらし、伊関・沖ヶ浜田ともに広い畑地を整備することができた。

畑地を基盤整備し、かんがい施設を作ることによって施設園芸等が可能となり、干ばつ時の散水、塩害の防止などに使われている。水が近くにあるということは農家にとって大変有益である。基盤整備による機械化導入がしやすい反面、受益者負担は重くのしかかる。農業の常として、「労多くして益少なし」では成り立たないが、一期工事が昭和五十七年頃から始まり、昭和六十二年に完成した。現在は農業をする人も少なくなり、せっかくの農地を有効に生かせなくなってきたという現状もある。



沖ヶ浜田の黒糖小屋

大字伊関の小字一覧

高石津川、源六淵、川氏、六郎ヶ戸切、山差合、猫之氏、汲川之尻、石返谷、黒毛渡、中畠、柳原、池之頭、二俣松、水溜、木取峰尾、赤尾山西ノ谷、並松、神戸、柵ノ木間伏、赤尾ノ山、黒伊毛ヶ田代、猿氏、吉井、黒石ガ峯、小通り山、長仁田、待木ヶ田尾、草伐、鳥屋、赤彼計、深迫、仁田本、小田尾、大坂、大園ノ形、濱走、尻掛、井手ノ関場、小濱、平ノ山、大片向、安西畑、孫開、白崩、溜池、伊保目ヶ崎、鍋倉、高倉、船付、福仁田、下廣野、廣野、大川、山王、石島、流合、濱脇、吉原、濱之上、大木ノ平、竹野、木折坂、小牟礼、大田尾、嘉石工門平、国ヶ田尾、高根ヶ山、三人間伏、長峯、山座、除山、伊戸須、丸鼻、岩屋、西之峯、新田、飯森、北廣野、仮俣山、源藤島、中ノ鼻、小仁田、樺山、交武ヶ田代、白津房、屏風石、松峯尾、中ノ入、牧山、通山、御茶吞松、笹有田尾、桑ノ木山、中山、大佐、黒山、石津川、大平松、堀之本、馬渡瀬、向田、焼入、遠正ヶ頭、大馬鹿ノ元、宮牟礼、茅切角、登掛、大久保、休佐工門平、中之峰、宮ノ平、宮ノ下、砂久保、前ノ原、隅ノ上、外園、伊関、湯崎長山、芝打峰、井手ノ鼻、黒鼻、大石ノ元、赤牟田、白藤田代、白野、塩津利田尾、井手ノ峰、源藏ヶ宇都、用ノ本、中城田、長尾田、井手ノ本、梶子山、又延、一葉山、大開、御前開き、蔵ノ打跡、山ノ出口

塩屋 牧

沖ヶ浜田の塩屋は文和元年（一三五二）、六代島主時充が食塩の足りないことを憂いて、相模の国である鎌倉から指導者の貝太郎を招いて製塩を営んだのが始まりである。旧暦の四月一日に火入れ祈禱を行い、四〇日間も釜をポツポツと焚いて、乾燥させて鍋を作った。鍋は石灰釜であった。釜が硬くなると、海水を汲み入れて火を焚き、一昼夜焚いて、一番多いときで塩は二斗五升の俵が八俵もできたという。塩ができたときは、塩をお膳に盛って神様に捧げ、酒や肴で祝った。明治時代になっても沖田平太が二〇歳頃まで塩焚きをしていた。

塩を焚くにはたくさんのお薪が必要となる。そのため、塩屋牧として広大な土地を島主に与えられた。沖ヶ浜田塩屋牧の由来を語る「製塩由来」によれば、

六代時充公に於て食塩の足らざるを憂ひ給ひ、相模の国鎌倉より



沖ヶ浜田の牧の神

指導者を招き、貝太郎、貝次郎は其の指導者なり。西之村立石、国上村湊等も釜を改め竹網代竈となし、山林原野一里方の土地を賜ひ製塩の薪用諸木を植えしむ。文和元年壬辰正月種子島竹網代竈の振興となれり。我沖ヶ浜田の竈を改め貝太郎の指揮を受け製塩業励むこと東海の潮を争ふが如し。北はさいきよふ川西はたんじやが山津々り木乃田尾志ようしが田尾迄南は軍場の田尾限東は海岸迄を支配し、穀物を植、植木を移し製塩七十五俵を年貢に納むる事五百二十年。貝太郎は我町に住居を結び妻子を設け、二十代久達公に於いて元文三年（一七三八）戊午国上村浜脇に沖ヶ浜田塩戸を分け、新に立製塩業を盛んならしめたりとある。また、塩焚きとは関係ない、本来の姿たる牛馬放牧のための牧は、集落ごとにあつたとされる。



浜脇神社蔵の古文書

浜脇の塩屋は、元文三年（一七三八）に沖ヶ浜田の塩戸が分かれて始められた。約一里四方、現在の伊関小から小浜までの間を製塩のための牧場とし、薪運搬や放踏のための牛馬の放牧も行われてい

た。浜脇神社の古文書の中には、釜の仕組みや牛馬を見分けるための耳の切り方の絵が数多く残されており、歴史を知るうえで貴重なものである。

米国商船カシミア号の乗組員救助

明治十八年（一八八五）九月二十日午後十時頃、浜脇の流合海岸にイザリ漁（夜の漁）に来ていた古田貞吉は、イカダで漂着したカシミア号遭難者五人を発見した。すぐ海の近くにある鎌倉平兵衛の家に連れて行き、平兵衛は伊関村の世話人である池亀覚助を呼んで介抱に誠意を尽くし、腹の減っている五人にあり合わせの煮たカライモを食べさせた。乗組員は食べ物のお礼にピストルと水差しと紙幣を置いていったが、村民は紙幣をお返しした。その後乗組員は五〇〇ほど離れた旅人宿池亀甚五の家に行き、風呂に入って座敷に上がり、浴衣に着替えた。浴衣を着たことのない五人を着替えさせるのは大変だったようである。また、精をつけるにはタマゴが一番ということ、村の世話人は各戸に供出させ、その数は一八〇個に上ったという。

また、ほかにも漂着者



水差し（市指定文化財）



古田貞吉翁の家の碑 (市指定文化財)

がいるかもしれないということで、松明をかざして二〇人ばかりを集め、南は安納の村境、北は国上の村境までを探したが、漂着者は見つからなかった。翌二十一日も夜が明けるのを待って新たに捜索隊が海岸に繰り出し、五人の漂着者が乗っていたと思われるイカダが小浜海岸の沖で見つかった。イカダにはタロイモが積んであった。

二十一日の午後、漂着者は馬五頭で西之表の町まで四時間をかけてたどり着いた。村の人たちは木折坂まで見送ったという。

その後、古田貞吉と安城の岩坪平左衛門に対して、アメリカ大統領から現金二五円と記念品として金メダルが贈られた。カシミア号乗組員の帰国後この事件を知った、奇人といわれ住所不定のサンフランシスコ在住のホレス・F・カッター氏によるアメリカ国会への働きかけがなければ、カシミアの救助事件も風化してしまうところであったことは確かである。その国会決議書は次のとおりである。

るアメリカ国会への働きかけがなければ、カシミアの救助事件も風化してしまうところであったことは確かである。その国会決議書は次のとおりである。

アメリカ合衆国の国会

議決書

第一六号議決書

米国風帆船カシミア

ル号乗組の存命者を懇

切取扱ヒタル日本住民に対し合衆国大統領ニ於テ相当の謝意ヲ表スベキ件に付決議

第一、亜米利加合衆国上下両院ノ衆議に於テ千八百八十五年日本国種子島沖ニ於テ難破セシ米国風帆船カシミアル号乗組存命者ヲ懇切取扱ヒタル該島住民の好意に対し合衆国大統領ヲシテ相当ノ謝意ヲ表シ且ツ右懇切ナル行為に對シ合衆国政府及ビ其国民ノ謝詞ヲ日本国政府及ビ其国民ニ通暢セシメルタメニ議決シ茲ニ之ヲ大統領ニ委任セリ

第二、大統領ヲシテ右の目的ヲ執行セシムルタメ洋銀五千弗若クハ必要トスベキ丈ケノ金額ヲ他ノ支出に宛テザル国庫金の内ヲ以テ支出スルモノナリ。

當時の小学校教師の月給が二、四円五〇銭。五〇〇ドルは円に換算すると六六〇〇円で

ある。贈与金は、米国国務大臣の意向でもあった教育の立ち遅れを正すために金額充てるよう、時の外務大臣大隈重信は求めた。伊関では贈与金の規約を作り、公債証書の購入と記念碑の建立を決めた。公債証書は購入先の第五国立銀行に預け、石碑は明治二十三年八



紀徳碑 (伊関小学校)

月に完成した。落成式は九月二十日で、漂着事件のあった「あの日」から五年目のことであった。石碑には、人命救助のいきさつを西之表の漢学者平山寛蔵が書いている。結びに次のような漢詩が刻まれている。

前隣の道 所係非軽、我皇有訓、維民仰成、災厄相恤、執不同情、勞微報厚、見彼至誠、永受其賜、育我郡英、石碑の裏面には、英訳文が彫られている。

また、伊関校区では紀徳祭が毎年九月二十日に行われる。太平洋戦争中、米英と戦争状態にあるときでさえ紀徳祭を挙行し、決してカシミア号から受けた恩義を放棄することなく現在まで続いている。このことは、伊関校区民の誇りであり、人間としての誇りでもある。離島の寒村であった伊関は、教育による人材育成、西京橋の完成による学童の命がけの通学からの解放、教育者（訓導）の雇用、奨学金制度、その他にも多くの恩恵を受けている。カシミア号の恩は未永く、これからも忘れることなく子孫に伝えられていくに違いない。



西京橋改修記念碑

第五節 移住

柳原集落は、明治十九年（一八八六）に甌島から移住してきた人々が開拓した地域である。同十六〜十八年には毎年台風が甌島を襲い、耕地面積の少ないうえに三年間の台風による被害、食糧不足に伝染病の発生という最悪の状態が続いたことで、住民は種子島への移住を決意し、同十九年四月十五日に漁船で出発した。人力と風力による航海は大変なもので、何日もかかって浦田の港にやっとの思いでたどり着き、当時の浦田の網頭であった浦崎長左衛門などの家に身を寄せた。

六月には鹿島村の蘭牟田、下甌村の手打、青瀬などからの移住者のうち一九戸は、当時の伊関村の区長である池亀新六の案内で柳原の地に移った。当時の柳原は原野であり、移住者のための長屋が四〜五棟建てられた。屋根は葦や藁で葺かれて床は竹を隙間なく敷き詰めたものであったが、数家族の共同生活であった。しばらくして各自が自分の住む家を建て始めた。その家も掘っ立て小屋のようなものであったが、生きるために必死になつて働き、炭焼き、県有林の下払い、材木の切り出し、女性には西之表の士族たちの家で家事手伝いとして働いたり、年若い女性は紡績工場等に行ったりしていた。

甌島移住の数え歌も伝わっている。二〇番までであり、その内容は当時の甌島のことや種子島に移住しなければならなくなつたことが歌詞に入れこまれている。



柳原移住百周年記念之碑



柳原移住記念碑

小浜には、与論島からの移住者や甕島からの人たちが住んでいたが、現在も杉家の家族が住んでいる。沖繩に近い与論島から小舟に乗って甕島まで行った後、戻って小浜の地を安住の地と定め、現在に至っている。漁撈等を生活の糧としていた。

又延集落の始まりは、明治の末から大正初期にかけてで、静岡県、熊本県からの移住であった。その後移住者が帰省したり、ほかの土地に移住したりした。伊関集落や柳原集落、安納の軍場集落の人々もその後転入してきたが、次第に交通の不便さ、生活のしにくさなどで人口が減り続け、現在は一軒のみとなり、平成二十七年（二〇一五）に柳原集落に編入された。

移住ではないが、かつて織佐という集落が沖ヶ浜田の山の上の方にあった。沖ヶ浜田、軍場等からの開拓団として入植したが、生活の不便さから土地を離れてしまい、廃村となってしまった。現在は沖ヶ浜田の人たちの畑があり、耕作に通っている。

第六節 戦争と疎開

昭和二十年（一九四五）四月、市内の小学校二年生以上の児童が大口・菱刈方面（現伊佐市）に疎開した。伊関校区の児童は、菱刈町の田中小学校区に疎開した。田中集落の公民館でも児童たちの出迎え式があり、集落内の子どもたちが出迎えてくれた。子どもたちの各家庭への振り分けは、伊関小学校の近くに住んでいる子どもは田中小学校の近くの家庭へ、伊関小学校から遠いところに住んでいる子どもは、田中小学校から遠い家庭へ振り分けられた。戦後田中集落と伊関校区の人たちとの交流も行われていたが、高齢化が進むにつれ、交流の機会も少なくなっていた。しかし、近年田中小学校の児童が、修学旅行で伊関小学校を訪れるなど、若い世代の交流活動も行われている。

疎開した伊関小学校の児童を受け入れた家庭の中に、種子島の現和小学校に教師として赴任したことがある石塚一美先生がいて、両地域の言葉の壁を取り除くことができた。また、石塚先生が伊関の子どもたち



慰霊塔（伊関神社）

が親に送るハガキの代筆もしてくれたようである。伊関小学校児童の疎開体験談として、沖ヶ浜田の古田フサ子氏のお話が『戦後七〇年学童疎開記念誌つなぐ』に掲載されており、当時の状況がよくわかる。疎開学童の帰島は十月一日から順次始まり、一年半に及ぶ疎開生活が終わった。受け入れ家庭も疎開学童も大変な生活を強いられたことだろう。

伊関校区でも、戦争に従軍した人や戦死者も多く、日露戦争で一三人、日中戦争・第一次世界大戦・第二次世界大戦で五人の戦没者名が慰霊塔に刻まれている。戦死者の中には遺骨も帰らなかった人もおり、断腸の思いである。「戦死やあわれ、人の死するやあわれ、その心や」国家のために命を捧げた人に敬意を払うとともに、秋には毎年慰霊祭を行っている。

第七節 人物

榎本喜右衛門

榎本家先祖の行司役喜右衛門は、一八代島主久時から永代高と屋敷を与えられ、榎本家には久時からもった手水鉢がある。喜右衛門が重用された理由は、鹿を七匹と身の片ひら（半分）を獲ることを久時に約束し、そのとおり獲ったからだという。それ以来、榎本家は代々伊関神社の神主を務めて、神社守をしてきた。



榎本家の手水鉢

第八節 年中行事

- 一 月 元旦祭り／このみやじょう（消滅）／福祭文（消滅）／舟祝
- 二 月
- 三 月 春の大祭（祈願祭）（大山神社）／送別会
- 四 月 歓迎会／柳原移住記念祭／沖ヶ浜田神社大祭／浜脇神社大祭
- 五 月
- 六 月 六月灯／牧祈祷（沖ヶ浜田、浜脇）
- 七 月
- 八 月 盆、先祖迎えと送り／施餓鬼（正立寺）
- 九 月 敬老会／合同運動会

- 十 月 秋の大祭（願成就）（大山神社）／市民体育祭／沖ヶ浜田神社大祭／浜脇神社大祭
- 十一 月 西之表市駅伝競走大会



正立寺の施餓鬼

ヤアコレニヨウソールド
 ヤアクサイモヤソールド
 ヤアコレトウロミウチニ
 ヤア祝フモハナチニ
 ヤアゼニト米ヲ祝フテ
 ヤア祝フコヤソールド
 ヤアイトヨモ今年ハ
 ヤア良キ豊年ノ年ナレバ
 ヤア門ノ松ガサカエタ サカエモドワリヨ
 良キ豊年ノ年ナレバ 四方ノスミニニイヌミ酒ガタタテ
 ヤアタテエモドワリヨ
 ヤア白金ノアオケコガネシヤミ杓デ
 涙ミタテエモソールド
 ヤア東三丁四丁ニハ白金ノ山ヲツク
 ヤア西三丁四丁ニハ黄金ノ森ヲツク
 ヤア黄金花ガツボンダ
 ヤアセニ花ガヒライタ
 ヤア火ノ神田ノ神オカドノ神
 ヤア三十二方ノウクリチ
 ヤア祝ヒコメヤソールド
 ヤアフツキミサイトクアイメウガミニ
 カノワセタマエヨ
 ヤアコレノオカドノモシヨミヤレバ
 ヤア黄金ノ門ガタチヤソールド
 ヤアコレノオカドノケイヨミヤレバ
 ヤア金銀ノマカカカリケル
 ヤアトビシラクロトビキキ
 ヤアトシタカラオオエ行ク
 ヤアストカメモマヒキタ
 ヤアステタイシノギキオウケケサレヨ
 ヤア町ノオ祝ヒオマアレ

伊関の福祭文

第九節 伝説

鹿七匹と身の片ひら

奥神社では、山祭りも済んで恒例の殿様と家来たちによる鹿狩りが行われていた。しかし、数日経っても鹿が一匹も獲れず、殿様も大層不機嫌であった。喜右衛門は伊関村の行司をしていた。行司役は山使いといって、犬を数匹連れて鹿を追い出す役目であった。狩りの指図をする大切な仕事であったため、大変な責任を感じて気が気でなく、「今日こそ獲れるよう奥神社の神様にもう一度お願いしよう」と、真夜中に伊関の浜に行き、竹筒に潮井を汲んで、奥神社に向けて歩き出した。途中柳原まで行くと、毎日の疲れがどっと出て、大きな松の木の根元でひと休みすると、ついそのまま眠ってしまった。どのくらい経ったか、あたりが騒がしいので喜右衛門は、はっと目が覚めてじつと様子を見かねて話していると、奥の山の神様と伊関の山の神様が大きな声で話している。「明日は鹿を七匹と身の片ひらを出そうじゃないか」「わかった。そうしてやろうか、可哀想だからなあ」これを聞いた喜右衛門はすっかり嬉しくなって、すぐにはね起きて急いで奥に行き、山の神様に清めの潮井を上げた。

さて、夜も明けて殿様のところへ進み出た喜右衛門は、「殿様、今日こそは必ず鹿を七匹と身の片ひらを獲って見せ申します」と申し上げた。いよいよ最後の狩りが始まり、家来たちは幾手

にも分かれて鹿を追い、あの峰、この山を駆け回り、懸命に狩りをした。昼下がりになり、七匹は獲ったが、片ひらが獲れない。だんだん西日となり、待ちかねた殿様が喜右衛門を呼び出して「お前は今日の狩で鹿七匹と身の片ひらを獲ると立派なことを言うたが、七匹は獲れても身の片ひらは獲れないではないか。責任をとって腹を切るがよかろう。」と厳しい言葉で責めた。側近の家来たちもすっかり困り、殿様を取り直した。その時、「鹿が獲れた」という声が出て、家来たちが一匹の鹿を引きずってきた。よく見ると犬が食い殺したと見え、頭はちぎれて胴体ばかりの鹿であった。恐る恐る喜右衛門は申し上げた。「殿様、あれが身の片ひらでござり申す。」「なるほど、そうか。確かに七匹と身の片ひら、見事じゃ喜右衛門。」とお褒めになり、さらに殿様は「これからは田も畑も作り放題で上納はいらぬ。今日獲れた鹿は全て国上村へ与えてやるぞ。」と言われ、それ以来榎本家では、明治の地租改正まで上納なしで田畑を作ったということがある。榎本家は神慮の深さに感謝し、自分の家の敷地の東に一祠を建て、奥神社から分霊奉祀した。これを人々が崇敬したのが大山神社、現在の伊関神社の始まりと言われている。

木折坂

柳原から伊関へ新緑の山あいを通って二キロほど行くと、突然見晴らしの良い峠にさしかかる。これが木折坂である。眼下に白砂の続いた先には、太平洋が洋々と広がる。

昔、島主の娘が伊関に住んでいた。娘はときどき、急な石の多い、目もくらむような崖をよじ登って国上の奥に狩りに出かけていた。坂を登りつめたところに二〇坪ほどの草むらがあった。そこで一息ついて、鹿倉の方へ行つた。娘は帰り道がわからなくならないよう、目印として木の枝を折り折り坂を登つていった。それでこの坂を木折坂と呼ぶようになった。

西京川

伊関から沖ヶ浜田に行く途中に西京川がある。昔、西京川は国上村と安納村の丁度境目になっていた。現在は、コンクリートの立派な橋が架かっているが、昔は橋もなく、少しでも雨が降ると川の水が増してとても危険な川だった。

昔中種子の納官に左京という坊さんがいた。昔の坊さんは手紙の取次をすることも仕事の一つとしていた。左京という坊さんは、国上村から安納村へ手紙を持っていく途中、河口を渡り始めた。この川は今も泥が多く危ないと言われているが、左京は泥沼にズブズブと入ってしまった、とうとう溺れて死んでしまった。それで、この左京坊にちなんで左京川と呼ばれ、いつしか西京川となったと言われる。西京川の洞穴付近では、現在でも左京坊のうなり声が聞こえてくるという。

西京橋の百餘くらい上流に、現在でも不気味な感じのする、長さ五〇メートルにも及ぶ大きな淵がある。昔はここにワニが住んでいて、人々は恐れおののいたが、ある年、伊関村の人たちでワ

ニを釣り上げようということになり、馬の子を生きたまま一頭エサにして、大きな縄で釣り上げたそうである。

田 浦

ワニの淵付近一帯には、広い水田が開かれている。ここを通称「田浦」と呼ぶ。現在この田浦にある田の持ち主は沖ヶ浜田の人が多く、伊関の人の田はほんの少しである。昔、伊関村の庄屋どんと安納村（沖ヶ浜田は昔安納村に属していた）の庄屋どんが境界分けをするとき、各々の村から歩き始め、出会った地点を境界にすることを取り決めたという。ところが、伊関村の庄屋どんはよく寝坊する人で、約束の日にもついうっかり寝坊してしまった。それで田浦の大部分は安納村にとられてしまったという。

山座の水

伊関と柳原の間に奥深く入り込んだところに山座という森があった。そこには名水と言われる、岩清水がある。岩の間から流れ出る水は少ないが、最高においしい水で、昔の人は死ぬときは山座の水を飲んでから死にたいと言ったと伝わる。

安 関 橋

現在の西京橋から上流五〇〇メートルくらいのところに、橋台として築かれた石垣が崩れずに残っている。昔はまだ西京橋はなく、

この安関橋が安納村と伊関村を結ぶ唯一の橋で、橋といっても大きな丸太を二本架け渡してあるだけであったという。安納と伊関の境界の橋ということから、この名前がついたという。

第一〇節 史跡、神社仏閣

伊関神社（大山神社）（祭神 大山祇神）

国上の奥神社の御分霊を勧請したものであり、一八代島主久時は伊関に飯屋を作り、狩りを行うとともに、かねてより崇敬する奥の大山祇神を奉祀した。

初めは、旧伊関小学校の西にある通称神山の松の大木を依り木として祀っていたが、安政三年（一八五六）八月、現在地に社殿を建てて遷座している。境内の手水鉢には次のように彫られている。

奉寄進 井関氏子中 西村〇〇

皆念新定

安政三年 辰之桂月 大吉日

沖ヶ浜田神社（祭神 天照大神）

塩釜の神とする火の神を奉祀する。製塩の始まりは、塩の需要を満たすために、時の六代島主時充が遠い鎌倉の地から製塩の指導者を招いて製塩を広めたことだと言われる。文化元年（一八〇四）、鎌倉より貝太郎という者が来島し、製塩の指導に当たった。貝太郎氏は東海の塩の含有度が高いのを知り、沖ヶ浜田にも塩釜を作って指導した。その当時、立石・湊・大崎・瀬泊・久志瀬戸・竹之川の地で塩焚きが始められて、間もなく島内に



伊関神社 (大山神社)



沖ヶ浜田神社



浜脇神社



又延神社

普及し、島内には二四の塩屋が建てられていたという。あるとき、高潮風雨の襲来によって製塩が不能となり、人々はどうしたらいいのかわからなかった。このとき、天照大神の御札を奉じて「浪風をしずめ給え」と祈願したところ、不思議なことに浪風がしずまったという。この神の恩に報いんとして天照大神の御霊を奉斎することを島主に願い出て、神社の始めとした。元禄二年（一六八九）の記録に「安納村に塩屋あり、沖ヶ浜田という」とある。

浜脇神社（祭神 天照大神）

文政三年（一八二〇）八月十七日、沖ヶ浜田神社の御神霊を勧請して、創建された。浜脇の製塩は、元文三年（一七三八）二〇代島主久達の時代に、国上村の浜脇に安納村沖ヶ浜田から

塩戸を分割して始められた。現在から二八六年も前のことであるが、以来沖ヶ浜田と浜脇の結びつきは強く、親類なども多い。特に神社の大祭（春の祈願祭、秋の願成就）の際は、それぞれの集落の代表者が出席して賑わいを見せ、現在まで連続と続いている。伝統を特別重んじる両集落の気風が垣間見える。

又延神社

小高い山の中腹に神社がある。現在では、大きめの平たい石を依り代として祀っている。人口の減少とともに校区役員を含めた神社の祭りは行っていないが、境内はいつもきれいにされている。残って管理する人のことを思うと万感胸に刺さる。田浦を見下ろす昔日のあったことが偲ばれる。

柳原の小寺（浄土真宗）

柳原は、甌島の出身者によって開拓された集落である。甌島は元来浄土真宗の島で、移住民も多くの人々が信仰しており、西本願寺派と東本願寺派がある。柳原には寺がないので、個人の家を小寺として仏教曼荼羅やお経の本を持ち回りで保管し、行事の際は集まって法会を行っていた。高齢化が進み仏具の持ち回りが難しくなり、現在は公民館に安置している。

正立寺

浜脇にある法華宗の寺。もともとは国上村本法寺の一庵であった。縁起書を含む貴重な史料が現在まで伝わっている。



正立寺



正立寺縁起（浜脇集落所蔵）

第一節 郷土芸能

タンバラ踊

浜脇集落のタンバラ踊は、屋島の合戦に敗れた平氏の一族が、四国の丹原を経て種子島にやってきた。浜脇もその一族で、刃地に逃れた一族は生活するにも人目を憚り、苦しい生活を強いられた。そこで集落民は、祭りごとや田植えなど、苦しい生活の中にも踊りで楽しみを見出そうと考え、昔を偲びつつ踊った踊りだと言い伝えられている。

また、外国との貿易が盛んな頃、オランダ人が浜脇の港にやってきたが言葉が通じず、その様子をチンプンカンと表現している。言葉が通じないため、身振り手振り、手まねの中でオランダ人が船を操る「權」で踊り出したのが始まりで、踊りで用いる団扇は、その權にちなんだものだという説もある。古老の話によると、二五〇〜一六〇年くらい前から踊られていたという。

出 場

こんど唐からオランダ人が下りまして

チンプンカンに曲りガネ

奴ノミ ショウレイ商売しよう

一、サー我が殿からもうたる小脇差を サータンバロのモガリにかけておいたサーそれを差すたびに思い出す オー



柳原の新地節 (中原康信氏提供)

二、サー 我が殿からもうたる尺八を サータンパロの

モガリにかけておいたサー それを吹くたびに思い出す
オー

三、サー 我が殿からもうたる鳴る鈴を サータンパロのモガリにかけておいた サー 鈴のなるたびに思い出す
オー

引 端

前の小くぼに 鹿がなく

寒くてなくかよ つれ呼ぶか

寒くてなくかよ つれ呼ばぬ

明日は御山に 狩ござる

新地節

伊関の大山神社の春の大祭、秋の大祭に踊られるこの踊りは、明治末期から大正末期にかけて前野家に身を寄せていた長崎の源吾という人物が、柳原集落のために作り、伝えたものだといふ。この踊りは、勇壮で動きの激しい踊りである。歌詞は次のとおりである。

一、新地どてから 小田山

見れば

名ぐれ御春が がたになう

新地御役人は このしろぶえん

焼かじゃ食われぬ 夏の魚

ちくてん節

昭和四年(一九二九)頃、大山神社に踊りを奉納するために、安納軍場の遠藤与市に踊りの振り付けを頼んだと言われている。

棒 踊

棒踊には、調子の遅いものと速いものの二種類がある。明治三十年(一八九七)頃、国上の久保田集落に川辺郡坊津町より、茅野栄吉という鍛冶屋が来ていた。この鍛冶屋は沖ヶ浜田集落にも仕事に来ていたので、仕事の合間に集落民に教えたのが調子が遅い方の始まりである。一方、沖ヶ浜田の古田嘉蔵という人が大正十年(一九二二)頃、鹿児島に兵隊として行ったとき、たまたま伊集院にいた。そのとき、戦友から棒踊を教わった。沖ヶ浜田に帰ってから古田氏は、それを集落に踊り広めたのが速い方の始まりである。現在は棒踊を踊る場合、この両方を織り交ぜて踊る。

第二節 年表

		和暦(西暦)
		伊関校区のできごと
文和元年 (一三五)	沖ケ浜田に製塩が始まる	
承応3年 (一六五四)	帰唐船小浜に難破する	
元文3年 (一七三八)	浜脇に製塩が始まる	
明和2年 (一七六五)	沖ケ浜田火事二五戸を焼く	
明治		
14年(一八八二)	国上村より分村し、伊関村	
15年(一八八二)	啓明小学校創立	
18年(一八八五)	カシミア号乗組員救助により、贈与金を交付される	
19年(一八八六)	甌島より柳原に移住	
20年(一八八七)	伊関簡易小学校となる	
22年(一八八九)	沖ケ浜田、伊関校区に編入	
28年(一八九五)	小学校改築工事	
29年(一八九六)	学林地を設定	
30年(一八九七)	伊関小修業年限を四年とする	
41年(一九〇八)	義務教育六年間。増築校舎落成	
42年(一九〇九)	伊関青年会	
大正		
13年(一九二四)	伊関尋常高等小学校と改称。高等科併設	

		和暦(西暦)
		伊関校区のできごと
5年(一九三〇)	校長住宅竣工	
10年(一九三五)	米人漂着記念碑建立	
12年(一九三七)	柳原移住記念碑除幕式、西京橋墜落	
15年(一九四〇)	部落有林野統一事業終わる。九五町四反九畝	
16年(一九四一)	西京橋完成(鉄筋コンクリート橋)	
20年(一九四五)	伊佐郡田中小学校区へ学童疎開 グラマン戦闘機八機北方より来襲して沖ケ浜田を爆撃、被害大	
22年(一九四七)	伊関小学校と改称する	
27年(一九五二)	特別教室落成	
29年(一九五四)	学校放送と自家発電設備を作る	
33年(一九五八)	新校舎落成(鉄筋コンクリート造) 校舎と紀徳碑を浜脇の現在地へ移設	
35年(一九六〇)	伊関小簡易水道設置	
36年(一九六一)	伊関小講堂落成	
37年(一九六二)	東邦金屬(北九州)沖ケ浜田に第二採鉱所開設	
38年(一九六三)	給食室完成	
40年(一九六五)	沖ケ浜田公民館竣工	
41年(一九六六)	教頭住宅竣工	
46年(一九七一)	校庭拡張工事	
49年(一九七四)	沖ケ浜田運動場開き	
50年(一九七五)	浜脇運動場開き。伊関港斜路完成	
51年(一九七六)	伊関集落民の奉仕による市道(幅三・八メートル、長さ一八〇メートル)の生コン舗装	
54年(一九七九)	文部大臣表彰碑建立 伊関一期地区過疎基幹農道完成一〇一〇メートル	
昭和		



伊関小学校旧校舎（昭和32年）



伊関小学校記念碑建設



米国人漂着地址（令和3年）



旧伊関小学校跡地（令和4年）



農協伊関支所（昭和56年）



伊関郵便局（昭和56年）

暮らしの風景写真

平成	和暦（西暦）	伊関校区のできごと
元年（一九八九）	54年（一九七九）	西京地区土地改良事業採択（七一九〇）
27年（二〇一五）	56年（一九八一）	小学校体育館完成
		伊関小創立一〇〇周年と紀徳祭
		伊関公民館落成
	57年（一九八二）	伊関へき地保育所完成
		伊関港捲揚施設完成
		伊関消防分団詰所兼倉庫落成式
	58年（一九八三）	伊関郵便局落成
		トコブシ稚貝放流（パイロット）事業
	59年（一九八四）	浜脇観光施設整備事業
		伊関小大規模改修工事完成
	61年（一九八六）	柳原集落移住一〇〇周年記念